

第99号

1985年9月25日

内容

大学教育の役割	1~2
第22回大学教員懇談会	2~3
第6回大学院共同セミナー	4~8
法人ニュース	8
千人会	9
業務通信	9~10
利用状況	10~12
わたしたちの合宿	11

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス

<所在地>
東京都八王子市下柚木(☎192-03)
電話 0426-76-8511~3
振替口座 東京 5-74590 番

編集
大学セミナー・ハウス

企画室
編集人 中川秀恭
発行人 立野晴夫
製作 中央公論事業出版

大学教育というとき私が関心をもっているのは、自分が大学で何を学んだのか、自分の教え子に何を学んでほしいのか、どういうことを身につけてほしいのか、ということだと思います。私は大学の機構とか教育の理念とかの専門家ではありませんので、今日は数学という専門分野で頑張ってきた一人の人間の立場から大学教育の役割についてお話しします。

外国で仕事をするとき、一番大切だと思うことはコミュニケーションの能力ということだと思います。それからもう一つは対人あるいは対社会関係を上手に処理する能力です。最低この二つがないとどこへ行っても仕事はできません。やはり人間と人間が集まって行うのが仕事ですから、純粋数学のどんな特定分野の研究であっても紙と鉛筆だけではできないものはありません。

そこではじめにコミュニケーションの能力ということを考えてみたいと思います。まず単純に考えれば自分の考えや知識を相手に正確に伝えること、それから相手の話をよく聞き、理解すること、そして一番大切なことは問題を討議する能力のことです。ではこのコミュニケーションの能力を大学教育の中でどのように育てていけばよいのでしょうか。

私は三つのモットーを考えています。一つは clarity と云うことです。それは単に多くのことを知ってほしいよというのではなく、知っていることを明確にすることができるといことです。二つは modesty ということ、それは知識に対する謙虚さということ

です。19世紀のフランスで活躍した生理学者クロード・ベルナールは自分独自の考えをもつことは大切だが、それに極度の信仰をもつ人は新しい意外な発見をするために適さない、と言っています。三つは articulation ということ。知識はそもそも相手に伝わらなければ意味がありませんので、どんなに難しい内容であっても噛み砕いて、単純化して伝えることが大切です。

ところで私は大学に行ってよかったと思うことがあります。私の場合、湯川秀樹先生に憧れて大学に進学し、はじめの一、二年は物

第22回大学教員懇談会
記念講演から

大学教育の役割



京都大学教授
広中平祐

理学を一所懸命勉強しましたが、しだいに物理学の中に流れている数学的な側面に自分が強く引き付けられていくことに気がつきました。そこから数学を志すことになったわけですが、とにかくこれだと思ったことに真剣に取り組み自分の特性が発見できるのは自分の特技を完璧とまではいかないにしても、ある程度のところまで掘り下げていって身につけるか、それを自覚するところまでいってほしいと思います。

外国へ行って人と仕事をするときには、まず自分のことを理解し

てもらわなければなりません。どこそこの大学の教授だ、といっても相手にはピンときません。自分の特技である数学の幾何の話をするといくらかわかった気になってくれました。特技の話からいろいろな会話がはじまり、うまくコミュニケーションをすることができるようになります。

また、特技に加えて大卒者とそうでない人のあいだに違いがあるとすれば、それは大学で培った「知的好奇心」の広さではないかと思えます。大学での専門的知識というのは、すぐに忘れてしまうものですが、こういう知的好奇心

の広さは、よりよいコミュニケーションには必要なことです。日本の大学もいろいろと欠点が指摘されていますが、様々な人が集まる大学では「知的好奇心」を広げる役割を十分に果たしているといえます。

次に対人および対社会関係を上手に処理する能力についてですが、われわれ理科系の人間にとってこれは重要な問題になってきています。一人の科学者が一生を捧げて作り上げたものが工業化され、人類の生活向上に多大な恩恵をもたらしていますが、反面、公害や軍備競争など多くの弊害も作

り出しています。朝永振一郎先生も言っておられたことですが、20世紀後半は自然科学者が社会的な感覚をもたねばならない時代になってきているといえます。

大学というのは単に講義を聴いて、単位を取って卒業するだけの場所ではなくキャンパス・ライフを通して人間関係の大切さを学ぶところでもあります。人間関係というのは不思議なもので若い頃にはその値うちがわからないものです。

人間関係というとき何が大切かといえは、次の三点を指摘することができます。一つはインフォーマルでカジュアルな交友関係を積極的に評価できるようにすることです。たとえば、二度と再会することがないような人との出会いでも損得勘定なしに大事にすることを学んでほしい。大学時代のちょっとしたつき合いでも大変役に立っている、という話がある実業家から聞いたことがあります。

二つは公式の場での形式的なエチケットとその背後にある精神を身につけることです。たとえば、女性がドアの前に来たら男性が開けてあげるの形式的なエチケットですが、その背後には困っている人、力の弱い人がいれば助けてあげるといふ互助の精神があります。エチケットと同時にその背後の精神を学んでほしい。

三つはモラルに対する勇氣を身につけてほしい。大学を卒業したアメリカ人は道義心が強いと一般に言われますが、大学生でも難民援助の資金を作るために徒歩で大陸横断するとか、選挙の応援に出

(2ページ5段めにつづく)

第22回大学教員懇談会——開館20周年記念企画——

主題Ⅱ大学の社会的役割

問われる大学・問う大学

期日——85年6月8、9日

△記念講演▽

京都大学教授 広中平祐氏

△シンポジウム▽財界人を囲んで▽

ブリヂストンサイクル会長 石井公一郎氏

丸紅専務 小島正興氏

安立電気開発本部研究部長 小池龍太郎氏

△シンポジウム▽大学人を囲んで▽

電気通信大学教授 西尾幹二氏

上智大学教授 垣花秀武氏

国際大学副学長 細谷千博氏

△運営委員▽

電気通信大学教授 井早康正氏

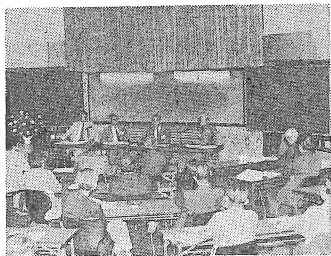
上智大学教授 蠟山道雄氏

東京女子大学教授 根岸愛子氏

中央大学教授 岩波一寛氏

△参加者▽57名(講師・運営委員を含む)

電気通信大(5)、上智大(4)、東京工業大・中央大・東京女子大・ICU・東京理科大



シンポジウム——財界人を囲んで——(講堂)

大学が直面している課題をめぐり、国公私立大学の教員が忌憚のない意見を交換し、相互に交流を深める場として誕生した大学教員懇談会は、今年で22回目を迎えた。今回は、特に大学セミナー・ハウス開館20周年記念として企画されたものであり、懇談会発足以来15年にわたる議論を踏まえて、「大学の社会的役割——問われる大学・問う大学——」をテーマに設定した。

在理由の根幹に関わる「社会における果たすべき役割や在り方」を深刻に問い直されているのではない。以上の観点に立って、今回はパネルに大学人ばかりではなく、財界からの参加を求め、大学と社会の抱える様々な具体的問題を手掛りとしつつ、「社会から見た大学」と「大学から見た社会」の二つの視点の交叉を通して、大学教育と社会との接点を求めて自由な意見交換が行われた。

プログラムの後、早速ゲストの広中平祐氏の記念講演からスタートした。著名な数学者として知られる氏は、最近、特に数学教育や一般の教育問題に対しても深い関心を寄せ、自身のアメリカ体験を踏まえて、「文化の違い」を視野に入れた鋭い洞察力に富んだ発言を行ってきた。この「大学教育の役割」と題された氏の講演については、フロントページにその要旨を掲載したのでご覧いただきたい。

（前ページからつづく）
かけるとか、モラルに対する勇氣をもっています。少々の知識や技術を学ぶより社会的な道義心を実感する経験をもつほうが有意義でしょう。
最後に指摘しておきたいことは、人間の生涯というのは学習であり、大学とはあくまで生涯学習の準備をするところである、という点です。大学を卒業するからにはこういう考えをしつかりもっていて欲しいと思います。
（文責・編集者）

建前と本音の違いについて多くの疑問が集中した。
通常、企業は「落ちこぼれた」人間を企業内で再教育することに よって新たな動機づけを行うが、これに対し「企業内で企業エゴに動機づけできない」「脱落人間」は、現代の社会状況の中では、むしろ健全なわけではないか、「企業内の動機づけは、企業エゴを超えた公的・全人類的な意味を持ちうるのか」「やる気のある人の定義が問題。やる気や「脱落」を どういう次元でとらえるかが重要」などの意見が出された。企業側からは「仕事をやって満足し、会社が利益を得て給料が上がる。これは大きな動機づけであり、否定する人はいないはずだ」との再反論も寄せられたが、議論は改めて「企業の論理」と「大学の原理」との鋭い対立・緊張関係を呈示した形で、夜のシンポジウムⅡに引き継がれた。

これまでの発題者や世話人の方々を招待し、その中から19名が参加されたが、夕食時には交友館で、20周年を祝うためのささやかなパーティーが開かれた。招待者の顔ぶれが披露された後、お祝いのスピーチが読まれ、小川伊作君（東京芸大修士2年）演奏によるリコーダーの調べを聞きながら、和やかな夕べを過ごした。

◇

企業人からの具体的提言を受け、今度は大学人自らが、主体的に大学の社会的存在理由を問うシンポジウムⅡでは、はじめに西尾氏が「ドイツの大学教授選衡法」の例を紹介しつつ、「日本の大学教授の人事にも競争原理を導入することによって、学問と大学間の自由競争を活性化させる必要がある。それが結局は、優秀な学生が特定の大学に集中するといった寡占状態を排除することになり、真の教育改革の道につながる」と「学問の場における競争原理導入」の有効性を指摘。

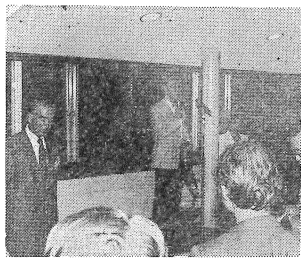
続く垣花氏は外国の大学における豊富な経験を踏まえ自然科学者の立場で、「戦前の軍国主義と戦後の経済主義は体質的には同じである」と戦後の日本経済を支えてきた経済人に対するラディカルな批判を展開。その証拠として、農業の切り捨てによる工業化、輸出に頼りすぎる経済構造、目先の経済利益しか求めない近視眼的思考を挙げ、大学の役割とは、「例えば古典教育などを行うことによつて、ヒューマンな」人格を作るところにある」と強調。バランスを失った科学技術の進展を防ぐためにも、「全体を見る眼」を養う必

要性を訴えた。

最後に細谷氏は、自らが副学長を勤める国際大学を例にとりつつ、「社会現象が非常に多様化、複雑化している中で、戦後の教育改革で取り残された大学院教育の改革が重要な課題となっている。国際大学は、国際人の養成を目的とする本格的な大学院大学だが、日本人と外国人を一緒に生活させる全寮制度を取り入れるなど数々の面白い実験を行っている」と「大学の国際化」の諸条件を呈示し、議論の材料を提供した。

討論では、「学問の自由競争は必ずしも教育水準の向上にはつながらない」とする「研究レベル」と「教育レベル」の相違についての問題や、教授、学生の大学間の自由な移動を促進することによる「大学の序列化」と「大学間格差」解消の問題、また興味深い指摘としては「本格的な国際化を避け、ゆるやかな鎖国主義」をとることによって、むしろ日本はその安定とアイデンティティを保ってきたのではないかとする本音の国際化論、比較的問題の少ない科学技術教育に対して、大学教育にヒューマンティを導入する際の一般教育の役割など、実際に大学教育の現場に携わる者の「実感」に基づく発言が目立った。しかし、大学人の間からはこれまでの討論を通して「財界人が大学に期待し、要求しているものと、大学人の語る「かくあるべき」とする大学の姿には大きなギャップがあり、大変困惑した」との率直な感想も聞かれた。

今回の懇談会は、今までとはや



懇親パーティーでスピーチする大学教員懇談会初代世話人・鈴木皇氏

や趣きを変え、企業から大学に対して注文や批判をありのままに提出してもらい、それを受けて大学が自らを問い直すことに特色があったが、二日目の全体会議では、前日の二つのシンポジウムでの問題提起と提言を踏まえて、「企業存在根拠」対「大学の存在意義」の軸を中心に、正午すぎまで議論が進められた。「企業は基本的に収益を最大限に効率的に上げることを至上命令としている組織なので、この論理に立つて大学の在り方を見るのは当然」であるが、一方「大学が学問の研究教育を通じて社会全体の進歩発展に貢献してゆくべきもので、企業を超える論理を持っているのもまた確か」であろう。先に述べた大学人の困惑に示されるように、討論の過程で浮き彫りにされたことは、両者の間に横たわっている溝が予想に違わず広くかつ深いものであったことである。

もとより、この総括集会で共通の認識を生み出すような結論を導くことはできなかった。しかし、その意図が、当初から「お互いに相手に対して主張し疑問を呈し、そして要請すること」にあったことを考えれば、嘘のように平穩

で、華美でさえある今日の大学にあって、懇談会が、「大学は一種の聖域で社会的批判の眼の届きにくい「真空地帯」である」（西尾氏）との自覚を大学人から引き出し、自らの社会的位置を測定し直すことを通して、「自己を問う」作業を促す糸口となりえたことは確かである。

なお、懇談会の詳細な内容については、現在企画室の手で編集が進んでいる『第22回大学教員懇談会記録』（実費頒布・問い合わせ先 0266-768533）をご覧いただければ幸いである。

●寄贈図書

85年4～5月

- 「パスのアメリカ」 亀井俊介殿
- 「アジアの友」 2～3月号
- アジア学生文化協会殿
- 「現代詩研究」 313 現代詩研究所殿
- 「金融経済」 210～211 金融経済研究所殿
- 「大学論集」 13、「大学研究」ノット 59 金島大学教育研究センター殿
- 「アセアンと日本」 クントン・インタラタイ殿
- 「現代日本産業講座」全8巻 中川秀恭殿
- 「新しき村」 3～5月号 安達義明殿
- 「自由」4月号、「社会学論叢」92 笠原正成殿
- 「イエスの広告術」 小林保彦殿
- 「紀要」第16号 早稲田大学システム科学研究所殿
- 「IDE」 260～261

- 「経済発展理論」 慶応通信殿
- 「仲裁・苦情処理の比較法的研究」 日本比較法研究所殿
- 「山と平野のふれあう街——写真でつづる八王子の昔と今」 大野聖二殿
- 「カウンセリング概説」 平野 馨殿
- 「Asian Culture」 38 ユネスコ・アジア文化センター殿
- 「社会科学研究」 30、「人文自然科学研究」 27 早稲田大学社会科学部学会殿
- 「キリスト教年鑑——昭和60年度版」 キリスト新聞社殿
- 「八王子の空襲と戦災の記録」全三巻 八王子市郷土資料館殿
- 「早稲田法学」 60-1、3、「人文論集」 23 早稲田法学会殿
- 「草の根から平和を」 尾形 憲殿
- 「人生の選択」「独立伝道の歩み」 高橋三郎殿
- 「贈る言葉」「全人教育の手がかり」「玉川教育」 玉川大学教育学科殿
- 「朝永振一郎著作集」別巻1 みすず書房殿
- 「一般教育学会誌」 11 一般教育学会殿



共立女子大堀田ゼミ——退館前の記念撮影

第6回大学院共同セミナー

主題Ⅱ「関係性」の原点を求めて

——現代社会における合理性の再構築——

期日——'85年6月21～23日

△運営委員▽

法政大学教授 田中義久氏

△参加学生▽40名(内女子17名)

- 法政(5)、東京・慶応(各4)、
- 東京芸芸、東京の水女子(各3)、
- 東北・埼玉・東京女子・早稲田
- (各2)、筑波・東京工業・一橋・
- 跡見学園女子・ICU・上智・成
- 蹊・津田塾・東洋・明治学院(各
- 1)、その他(3)、合計19校。

がある。

セミナーの概略の報告にあたり、ご指導頂いた古井・見田・宮島・塚本・栗原の五氏と終始、企画から運営まで多大なご尽力を頂いた田中氏にこころから感謝の意を表したい。

◇

プログラムの連続シンポジウム形式で実施された。開講式、参加者自己紹介のあと、早速、セミナーのプログラムとして田中・見田両氏の講義が行われた。

全体講義Ⅰで田中氏は、方法論的「関係」主義の立場から社会諸関係の連関構造と意味の諸相を理論的に解明しながら問題提起された。

現代の文明社会にあって、私たちは諸個人の「内なる自然」の諸力を二重・三重に自立化(「物象化」)させながら「物」に憑かれた、生命のない無機的な世界としての社会諸関係のなかで、日々の生活を営んでいる。この世界の統合原理は、人びとの共同主体性の表現としてのゲームンヴェーゼンではなく、いまや疎外されたゲームンヴェーゼンとしての「貨幣」と「商品」というマンモンの神にほかならない。

この自立化した社会諸関係の中で、「豊かな感性」(sense)の諸力は功利主義のそれに転換させられてしまい、諸個人にとつて他者からはもはや豊かな感性の表現主体ではなく、私的実現のための手段でしかない。

人間諸個人は自然と歴史のなかに嵌め込まれた一つの小さな粒でしかないが、「意味」はこの一粒の人間がもっているアンサンブル

としての「内なる自然」からしか生まれてこない。コンクリートの固まりにすぎない新宿の高層ビルにはそれ自体としては「意味」は存在しない。

本来、人間の内なる自然の意味付与と意味獲得の力としての「sense」は、文脈依存的・存在論的な「意義」(significance)の回路と普遍妥当的・認識論的な「意味」(meaning)の回路を介しながら、両者が統合されたときに実現される。現代社会にあっては、功利主義の「sense」がシステム

的統合としての「significance」の回路で自足してしまい、「meaning」のレベルの統合にまでは至らない。これが今日における「没意味」の状況に他ならない。内的自然の意味を求める「あがき」が単なるコンクリートの固まりでしかないものに意味を付与しているのである。

「sense—significance」で成立する文脈依存的な合理性を、現代のシステムの統合の背後に見出しながら、「sense—meaning」において成立する普遍的な合理性をいかに再構成するか、ということが現代社会の合理性の問題である。つまり、それは具体的にはシステムの統合からこぼれ落ちる諸個人の価値合理的なものを他者と相互行為させながら、「外的自然」と

の回路をどういうふうなイメージ化し、それを「シンボリックなマトリックス」にまとめあげるかという課題である。

講義のあと、参加者から「物象化されない関係などというものにリアリティを感じることはできない」という疑問が出された。社会

諸関係を統合する「幻想諸形態」としてのゲームンヴェーゼンは、歴史のなかでつねに希求されていたものであるが、今日それにリアリティがもてないというのは、依然として功利主義Ⅱエゴイズムの意識が乗り越えられていないからである。「諸個人が日々の生活のなかでエゴイズムを乗り越えようとする試みに踏み出したときに物象化されない関係性が見えてくる」と田中氏はいう。

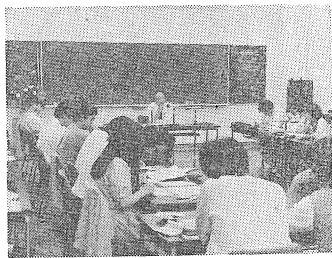
続く全体講義Ⅱで見田氏は、現代思想がこの現代社会の「虚構性」をいかに乗り越えようとしているのか、「離陸の思想」と「着陸の思想」という異質な二つの考えを手がかりに模索された。

虚構性を逆手にとって虚構を自らの「存在の技法」としてしまいい、虚構のかたに自然性の「真実」などは存在しないと考え、軽快なフットワークで時代を突きぬけていこうとするのが「離陸の思想」だ。これに対して、「着陸の思想」は虚構のかたに自然性の「真実」の存在を信じつつ、時代によって作られる存在であること

を拒否し、時代を超えた生活者の直観にたつて、自然性の大地に根ざしながら虚構のない世界をシンブルに希求する。

この現代思想の二潮流を私たちは、単純な選択の問題として考えることはできない。むしろ二つの思想はそれぞれを突き詰めていけば一つに重なり合うだろう。現代世界はいまや地球的規模において地殻変動を起こしている。第三世界を収奪する一方で、自分たちの生活の利害を正当化する回路をつ

- △ゲスト講演▽
小説中の「私」
——虚構と現実——
古井由吉氏
- 作家
△全体講義▽
I 社会関係と意味 田中義久氏
法政大学教授
- II 「関係の理論」への助走——現代日本の現象を素材に——
見田宗介氏
東京大学教授
- △シンポジウムの発題▽
I テクノクラシー化と合理性の類落——現代フランスの社会問題と文化問題の視点から——
お茶の水女子大学教授
宮島 喬氏
- II コミュニケーションにおけるリアリティ——アメリカのコミュニケーション状況——
東京女子大学教授 塚本三夫氏
- III 住民運動と民衆理性——日本の近代化における三つの事例——
立教大学教授 栗原 彬氏



全体講義の田中義久氏
(大学院セミナー館)

「合理性」問題は'83年に実施した『ヘブライズムとヘレニズム』で一度取り上げられているが、今回は、今年3月に実施した第131回大学院共同セミナー『管理社会のライフ・スタイルを考える』をさらに深く掘り下げた現代社会論としての「合理性」の問題という特徴

（前ページ4段めからつづく）
トであっても、それがすでにモテ
イーフを含んでおり、さらにそれ
がかたちをかえてテーマを呼ぶ。
その時の意欲そのものになりきっ
た「私」と日常生活を営む「私」
との間には少し差がある。だから
こそ作品は日常の「私」の予測し
なかつたものを打ち出すし、いさ
さかは日常の「私」を超えること
がある。

私小説で作家が自分のことを表
現する場合でも、「作中の私」と
作品を書いている「筆の私」は同
じではない。赤裸々な私小説でも
その伝記などをつぶさに調べてみ
ると、いろいろと虚構が入ってい
る。現在の「私」をよりよく表現
するために虚構を入れた方がよい
場合だつてある。また、小説嫌いの
ノンフィクション「作家」が
（この表現自体矛盾しているとし
かいいいようがないが）限りなくフ
ィクション度をゼロにしようとし
ればするほど、逆にフィクション
度は大きくなる。しまいに書い
てきた自分がフィクションになっ
てしまう。

さらに「私」を全く入れない客
観小説というのがあるが、どこか
でその小説全体を見ている「私」
の眼という視点があるはずだ。そ
うでなければ、複数の登場人物の
様子を同時に書けるはずがない。
「筆の私」とも「暮らす私」とも
直接的にはつながらないような、
「作品の眼としての私」がそこ
には無意識のうちに描定されてい
る。

このように小説の世界でも「暮
らす私」「筆の私」「作中の私」

「作品の眼としての私」というよ
うに四重の「私」の内訳が考えら
れる。

主格としての「私」の起源

西欧の文章でいうと「私」とい
うのは、発言の責任の所在を表わ
している。事実を単にこうだとい
っているのではなく、「私が思っ
たかぎり」あるいは「私が信じて
たかぎり」で「そうなんだ」とい
うにすぎない、というように現
実に対するある種の留保を表わし
てもいる。「私」という主格が言
語的にどういうふうになんかき
たのかを次に考えてみよう。
ギリシャ語やラテン語では、動
詞が人称変化するから主格として
の「私」を置く必要は必ずしもな
い。だから、エゴという語を使う
のは特に「私」を強調する場合だ
つたらしい。

漢語には「我」や「吾」という
文字があるが、前者はぎざぎざし
た歯のついた戈（ほこ）の意で、
後者は祭礼のときの中心になるら
しいある器に「五」の字型の蓋を
かぶせるところから「まもる」と
か「ふせぐ」の意だそうだ。しだ
いに両語の本来の意味が失われ
て、たんに仮借（かしゃ）として
主格を表現するようになったにす
ぎない。いまとなつては主格がど
ういうふうにいわれていたのかわ
からない。

昔は個人性が極めて薄かったの
で、共同体全体の呼称で自分を表
現したのも、普通名詞で表現して
いたのかも知れない。たとえば、
「犬」をテーマとする一族では
「犬いわく」というように、また

現代日本語でもよくあることだ
が、主格を一人称の複数で表現す
ることがよくある。「われわれ」
「うちらら」という表現は「わ
たしたち」という意味ではなく、
「わたし」という意味の場合が多
い。またさらにおもしろいことに
は「手前」や「自分」という表現
のように一人称と二人称が通用す
る場合があったり、「余」「僕」
「妾」などのように三人称を一人
称として使う例もある。

今日一般に使われている「私」
という文字は、穀物を表わす「禾」
と私有することを表わす「厶」か
ら成っているところから「私有と
なった稲」という意味だそうだ。
この「私」ということばは、他に
孤独の「独」、偏愛の「偏」、邪悪
の「邪」、利益の「利」、秘密の
「密」、感情の「情」、さらに「普
段着」、「小用をたすこと」、男女の
「陰部」を表わしている。つまり、
一歩も二歩も退かなくてはならな
いもの、公明正大には必ずしも主
張できないものという意味が「私」
という文字には含まれている。い
までもこれらの意味は十分に現代
の「私」の中に入っている。

こうみてくると、日本語の主格
は西欧の責任の所在、現実への留
保としてのエゴという意味の他
に、二人称や三人称との融合とい
うことも加わり、どこからどこま
でが純粋な「私」なのか人稱の語
源からもきわめ難い。だから
日本人は論理的思考ができない、
ということだったのだが、いまは
むしろ不確定性としての現実に対
応する有力な武器になるかもしれ
ない。ただそれをたれ流すのでは

なく、意識して「私」というもの
の様々の内訳を認識に活かすこと
が大事ではないか。

関係としての「私」

「私」というのは古典的に考え
られているような原子なわけではな
い。私小説では自分のあさましい
振舞いなどをきちんと書いてみる
ので感服するが、次の瞬間、首を
ひねってしまふ。主語としての
「私」が目的語としての「私」を
描くうちに、相互に変動しやしな
いか。「私」というのは無数の他
者の融合体のようなものだ。

ある時代に力に満ちてひとつの
強い政治を展開し、文化を花咲か
せていた世界なり階層がしだいに
衰弱してくると、それにかわるも
つと健康な力にあふれた外部の世
界なり階層がそれを滅ぼす。自己
改革とか自己構成とかいうのが、自
分で自分をどうかするというのは
自己矛盾で、所詮、神が私を罰す
るとか他者が自分をどうかする
というのがこれまでの世界の歴史だ
つた。

ところがいまや、地球全体が外
部をもたなくなつてしまつた以
上、自己改革とか自己構成がそれ
自体としていかに自己矛盾だった
としても、今やそれに立ち向わな
なくてはならない。その時に、人間
関係の基礎としての「私」を分割
不可能な、確固とした自明な存在
として捉えるだけでなく、関係
そのもの「であるような、あるい
はそのつどの「試み」でしかない
ような「私」を指定することが必
要ではないか。

（文責・編集者）

りだが、古井氏は参加者からの質
問に答えながら示唆に富む発言を
された。「近代的我自我の超克」と
いうが、自我の中には余りにも多
くの他者が入り込んでおり、その
内訳は余りにも多い。自我の内訳
を探っていくうちに、別の自我の
あり方が見出されるのではない
か。「自分が日常生活の中で思っ
てもみなかったことを、小説家は
表現するといふ、いかにわしき」
をもっている。社会学もこのよう
ないかがわしきをもっているの
ではないか。「いままでの学問は
『建築』のイメージがあったが、
これからは『音楽』のイメージ、
つまり認識は一つの旋律として世
間に流し、そこから生まれる認識
は世間にまかせるといふ姿勢が必
要ではないか」と。観察する「私」
によって「暮らす私」を禁欲して
きた社会科学に対して「仮構」の
打ち出し方、「作家」としての文
体に責任をもつ姿勢など古井氏の
発言は、参加者に大きな感銘を与
えた。



二泊三日の連続シンポジウムで
は日常の生活意識から徹底的に距
離をとり、そのつどの試みとして
の「私」を相互に呈示し合ひなが
ら、日常意識からみればリアリテ
ィの感じられない「仮構の世界」
を共同主体的に作り出してきた。
役割遂行や功利計算としてではな
い、他者との真剣な出会いと討論
によって、物象化された社会諸関
係を乗り越えていく糸口をつかむ
ことができたのではないだろう
か。

●参加学生のレポートから

象徴機構の出現と変転

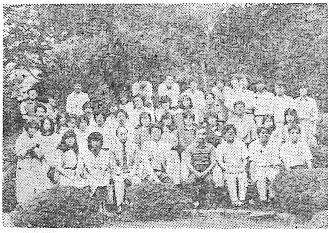
——伝統と現代——
東京大学M2 (相関社会学)

勝又 正直

「関係の自立化」を物象化とするならば、それは伝統的社会にも存在する。関係をふたたび取り返すために、オルギア(祭)が行われる。すなわち、ケが枯れたら、ハレを行うわけである。このことを政治的側面から見ると、伝統主義の支配→カリスマの変革→カリスマの日常化→伝統主義のくり返してである。

現代における物象化を明らかにするために、この伝統主義における物象化との違いを明らかにしなくてはならない。

まず考えられるのは、伝統主義社会のハレとケのくり返しが現代では喪失していること、しかも伝統主義社会ならばきわめて非日常的とも思われる変化が、現代では日常として存在し、むしろ不可欠な要素となっていることである。伝統社会と現代社会における異常なもの出現、つまりそれ



——みずみずしい人間関係の回復をめざして——
前列右より(2人目から栗原、宮島、塚本、古井、田中の諸氏)

までの説明の体系では解釈できないものに対する処理の違いである。

伝統主義では日常的「言分け」の構造はみ出す部分は、カリスマ(それ自体異常なもの)によって説明され、かつオルギアによって解消される。これらのオルギアの単位となる共同体を連合した「国家」は呪術師を頂点においてその体系を正当化し、そこからのズレは祭儀や呪術王の交替により解消した(中国の場合)。

インドの場合には体系から説明されないものは前世におけるふるまいの結果とされ、その処理は呪術師IIパラモンにゆだねられた。

古代ユダヤの場合、説明不可能と思える苦難こそ神の意志である。それは解消すべきでなく固執すべきである。異常とも思われる事態は超越的神から説明され、むしろそれが目ざされた(禁欲主義)。

これを万民に適用したキリスト教の論理は神と個人のみを結び、救いとその手段だけを有効な文脈とした。それにより以前の、多方向の文脈に依存していた合理性は、救いとそのための手段と文脈にのみ依存する合理を生んだ。絶えず今まで以上の苦業とそれによる変化こそ喜ばしいものとなったのである。そしてこの外化された神と救いからの自己規定こそ近代の物象化を示している。

そしてそれが目的・形式合理性を高めるにつれて究極の点たる神は昇華してしまい、没意味のツリが現われる。つまり現代の物象化は関係一般の自立化ではなく、目的・形式合理的ツリーの形態を

雑感——セミナー参加者

への手紙

小峰 直史

拝啓

大学院共同セミナーから、早や一ヶ月が過ぎ、海山の恋しい季節になりました。セミナー参加の皆様、その後お変わりございませんか。

あれから、石牟礼道子さんの『苦海浄土——わが水俣病』を読み直しています。この本は、高度に発達した資本主義社会の(人と自然)、(人と人)との連関の断絶について警鐘を鳴らしていますね。水俣病に象徴される公害を引きおこした日本の高度経済成長の(恩恵)に浴している私は、たとえようのない虚脱感・無力感に再び襲われました。

とった関係の自立化である。この関係の自立化はかつての伝統主義の一つの展開であって対立物ではない。

むしろ必要なのは、この関係の体系からはみ出す方向や文脈の混乱を結び合せていくことである。これは物象化の進展によってむしろ増大する可能性であり、かつての共同性とはまったく異質の融合・連合である。異常なもの(不確定性)を処理する象徴機構(宗教)は現代の物象化を生んだ。現代にもとめられるのはさらに分化させつつ、融合・錯綜させるような象徴機構である。そうしてそこに新しい体系の出現とそれのさらなる変転の可能性が生まれるのである。

そんな陰うつな気分を迎えた七月のある日、どこかで切った笹(おそらく七夕に使うのし)のようにかついでいる小学生の集団に出会いました。彼らの生き生きとした姿に心が打たれました。人間が本来、持っているはずのキラキラとした感性。ここに、見田先生の言われた、「人間解放の五パーセントの可能性」があるのではないかと……。

「人と自然」(人と人)との(はかない、(もろい)関係を嘆き、自ら解放の可能性を閉ざすのではなく、豊かな関係の構築を模索する必要性を、セミナー参加後の小さな集団との(出合い)の中で発見しました。その事を皆様にお知らせしなかったのです。セミナーでおこなわれた真剣かつ活発な議論の中でも、人と人と

想像力による「私」

のリアリティの獲得

国際基督教大学4年(社会学) 原文次郎

現代社会において「ひと」と「ひと」との社会関係における「意味の希薄化」ないしは「意味の喪失」が問題であるとして指摘されるのであるが、このような状況の時間的・空間的位置付けもまた、問題考察の前提として検討されるべきであろう。

考察の対象を時間的・空間的に検討するためには考察の主体となる「私」の視点が重要であることを念頭に置く必要がある。このような「私」を指定するとき、社会関係の問題は私の生き方の問題であることになる。まさに生活者として

の(有意味的)な関係性の成立可能性について、積極的な評価を持って論じられていなかったことが気がかりでした。(人と人)との関係は(あやうい)ではなく、(また)大学セミナー・ハウスは(龍宮城)でもない、私は感じるようになってきました。なぜなら、セミナーでの連夜の交流は、見知らぬ人どうしの豊かな関係構築の可能性を示しているように思えるし、それは、まさにもなく、我々セミナー参加者のかけがえのない現実生活の一部なのですから。

わずか三日間ですが、同じ場で学んだ仲間達の、いっそうの活躍を祈りながら筆をおかせていただきます。

7月22日

敬 具

(東京基督教大学大学院 教育学研究科修士1年)

の自己に気付き、これを考察する主体として(考える自己のごとく)自覚すること自体が社会関係に意味付与する活動に他ならないからである。この意味で社会関係を問題にするとき、その考察は私自身を反映するのである。

地球上に住まうよう条件付けられている人間の数々の営みのうち、時間的には歴史の中から現代を選び、空間的には(場として)広くは全地球的規模で、狭くはアメリカ・フランス・日本の社会を選ぶのは、そこが歴史的・社会的文脈において「私」が住む世界であるからだろう。

社会関係の持つ意味が当該社会関係の当事者である「私」の意味理解に帰着するとすれば、何者に

法人ニュース

昭和60年度第1回

共同セミナー委員会

新委員会の発足
5名の新任委員を迎えて
'85年6月19日/私学会館

〔出席者〕 岡宏子、岡野加穂留、尾本恵市、小浪充、江沢洋、戸沼幸市、深海博明、山下幸夫、栗原彬、鈴木一郎、鈴木和子、竹内啓、室田武、川端香男里、坂本百大（敬称略）

本年度の委員会は、別掲の委員名簿にみるように5名の新任委員を迎え、二五名の陣容でスタートした。第1回委員会は、前記一五名に、ハウス側から中川館長、飯田名誉館長、西田専務理事、企画室スタッフ三名が出席して開催された。

議事は、中川館長の開会挨拶に続いて正副委員長の選出に移り、前年度に引き続いて、岡宏子氏が委員長に、江沢洋、山下幸夫両氏が副委員長に推され、承認された。次に、前年度後半以降のプログラムの実施報告および今年度のプログラムの準備状況の報告が、担当の運営委員からそれぞれ行われ、次年度の企画についての協議（とくに大学院共同セミナーを中心に）に入った。

新委員の歓迎晩餐会をはさんで活発な意見の交換があり、以下の提案が出され、この中から具体化の方途を探ることになった。

- 記号論セミナーの第Ⅱ部
- 生命倫理

○確率論
○文学と風土

最後に企画室から、資料に基づき近年の参加学生の動向について一、二年生の減少が顕著になっている折から、低学年を念頭に置いたセミナーの企画が必要ではないか、という問題提起が出された。これに対しては、各大学におけるポスター掲示、資料の配布等の再点検を通して、募集方法の強化を図ってほしい、という意見が出され、この問題は今後、継続して協議していくことになった。

昭和60年度共同セミナー委員

（就任順、敬称略、○印は新任）
○委員長
岡宏子 聖心女子大学教授（心理学）

○副委員長

江沢洋 学習院大学教授（理論物理）
山下幸夫 中央大学教授（経営史）

委員

- 板垣雄三 東京大学教授（中東現代史）
- 岡野加穂留 明治大学教授（比較政治）
- 小田晋 筑波大学教授（精神衛生）
- 宮田登 筑波大学教授（民俗学）
- 尾本恵市 東京大学教授（人類学）
- 小浪充 東京外国語大学教授（アメリカ研究）
- 戸沼幸市 早稲田大学教授（建築、都市計画）
- 深海博明 慶応義塾大学教授（国際経済学、国際資源論）

も代え難い固有の存在としての「私」のアイデンティティがどこにあるのかが問題となる。「私」が他者との関係性によって存在の意味を持つ身であるならば、「私の身は私の身のようにあって私の身でない」わけでは、他者との相互関係によってその都度成立する危うい私のアイデンティティの行方は、私と他者との間の境界領域が不明確であるゆえに一層私から遠ざかってゆくように思われ、そこをかるうじてつなぎ留めている私

青柳清孝 国際基督教大学教授（文化人類学）

池上嘉彦 東京大学教授（言語学）

栗原彬 立教大学教授（政治社会学）

杉田弘子 武蔵大学教授（ドイツ文学）

鈴木一郎 津田塾大学教授（比較文明論）

鈴木和子 日本女子大学教授（独文学）

竹内啓 東京大学教授（統計学）

中西進 筑波大学教授（古代国文学）

室田武 一橋大学教授（数量経済学）

○合田周平 電気通信大学教授（システム工学）

○鴨武彦 早稲田大学教授（国際政治）

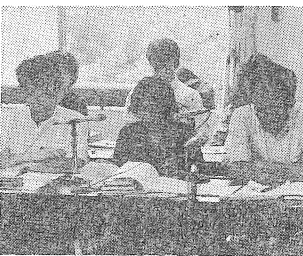
○川端香男里 東京大学教授（ロシア文学）

○坂本百大 青山学院大学教授（哲学）

○中野収 法政大学教授（コミュニケーション論）

（究極的に「我」として踏み留まる限りにおいて、この「私」は欲望の源泉としての私であろう）を見失うことを恐れる。このような意味で、方法論的「関係」主義における私は人間的自然つまりは内的自然として人間外部の外的自然と対置されて共に自然の一部として組み込まれる時に、他者との差異性に基づく固有な存在の主張を脅かされてはなはだ不安な状態に陥るのである。「私」のアイデンティティに対する脅威は常に自己の確証を求める。このために、私は固有の存在としての自己を常に主張し続けねばならず、自己の存在証明を試みる毎に、社会的文脈や他者との相互関係によって決まる「私」を前にして「震え」を感じる。

個人は分割不可能な原子のような存在であるという認識を脱して、自己の解体を経験する時、自己の再構築の過程は始まるが、自己に無自覚であることに気付くこの過程においても、社会関係に意味を付与する「私」はこのようにしてアイデンティティ喪失の危機の前に震える「私」であるように思われる。



レポートを発表する——
総括討論

寄付金報告

'85年6~7月

「私」と、固有の自己の存在の確証を求める「私」、そして社会的文脈のもとで他者との相互作用によって創出される「私」の三つの「私」が葛藤を起こしている状態で、日常生活のリアルティを確保するためには、第三の社会的文脈での「私」のリアルティを想像力によって獲得する必要があると思われる。その際の契機となるのは、私の場合には第二の固有の「私」への執着である。一方、固有の「私」への執着は自我の超克を阻止するので、これに揺さぶりをかけるために第三の社会的文脈での「私」があるのだと言いうこともできはしないだろうか。

△教育プログラム資金▽
五,000円 上智大学教授

五,000円 鈴木 皇殿

二五,000円 日本エディタースクール出版部殿

二〇,000円 第六回大学院共同セミナー参加者一同殿

一〇,000円 第13回10大学合同セミナー参加者一同殿

△一般寄付金▽
二〇,000円 横浜市立大学医学部付属高等看護学校

一〇,000円 松本明彦殿

一〇,000円 お茶の水女子大学新入生セミナー殿

一〇,000円 第13回10大学合同セミナー実行委員会殿

五,000円 京浜女子大学自然観察講習会殿

◇現在会員一、五五七名(実会員数)です。

(通算入会者一、七五一名)◇新しく会員となられた方々

5名(第79回報告(申込順))

C 大妻女子大学教授

C 埼玉大学助教授

C 日本女子大学附属高等学校教諭

C 大学セミナー・ハウス総務課長

◇千葉大学教授

◇会費ありがとうございます

田中 國昭殿

鈴木 哲郎殿

田中 未末、齊藤信房、荒井基、板倉讓治、佐藤進、中川作一、緒方眞也、柴田勇進、竹内喜代子、福田延衛、絹川正吉、野沢浩、藤井耕一、細谷千博、今堀和友、島田淳子、宅間宏、大畑篤四郎、古畑和孝、徳末愛子、竹内喜夫、中嶋博、都留春夫、望月継治、二谷貞夫、宮崎照子、小倉充夫、猪瀬尚志、朝野洋一、和田英一、北野美枝子、片岡清子、松田豊弘、大塚博、関口富左、佐久間まゆみ、岡田正弘、鈴木千歳、市井三郎、中村幸安、秀村欣二、長清子、大内力、坂野正高、見田宗介、川添利幸、太田秀通、名東孝二、福山直美、島海俊宏、高橋忠次郎、白井久和、柴田恭二、川島須美子、江沢洋、金子晃雄、奥村敏恵、松尾浩也、栗林健二、安宅光雄、吉田幸弘、朱牟田夏雄、原治、笹森健、高橋康之、高橋勇悦、入江和生、帖佐哲郎、吉松藤子、中野スミ

子、阿部育、山本襄治、林泰造、鈴木務、嶺哲六助、石川信男、黒田成俊、川内脩司、柴田政利、常行敏夫、光延明洋、讃岐和家、辻達也、川田侃、慶谷伸代、横田忠夫、川田雄一、三橋文雄、浅川淳、橋谷卓成、松平文明、石井進、奥田真丈、栗原尚子、中川一郎、西川治、和田義信、田島恵児、金平重雄、伏見康治、添谷陽子、藤平憲、阿久津喜弘、中村浩三、永井博史、松島恵、矢部章彦、藤原鎮男、長浜洋一、上田初子、綿引二郎、佐藤誠三郎、鶴見和子、柏木恵子、小池滋、中村登志哉、古本捷治、山西貞、黒田道雄、加藤一郎、中村進、築田中世、山崎誠、梅沢豊、石川馨、田中国昭、山口美芳、宮本瑞夫、谷下市松、土田重克、三宅彰、角瀬保雄、石川京子、吉田美穂子、橋本智、小川信子、山井湧、小西悟、村田勝彦、林俊一、武者利光、太田善廣、小池生夫、後藤光一郎、米村貞蔵、長谷川幸男(敬称略)

千人会員からのたより

私の七十四歳誕生日の祝詞ありがとうございました。お蔭さまで無事にまた会費をお送りできましたことを幸甚に存じます。

元明治大学教授 藤井 耕一

学生時代から長年お世話になってきたセミナー・ハウスの千人会に加えていただき、誕生カードに感激しております。本当にわずかですが、送らせていただきます。

筑波大学講師 佐久間まゆみ
◇ 大学セミナー・ハウスが、今後ますますな困難をのりこえて地道に発展されますようお祈り致しています。 秀村 欣二
◇ 故川島順平(早大教授)、二月二

業務通信

'85年6・7月
初夏の合宿研修から
4・5両月連日のように繰り広げられた新入生オリエンテーションは、6月に入ってから少なくなりましたが、7月中旬に完了した。7月後半からは夏休みの多様な研修集会を迎え、ハウスの最盛期に入る。6・7の利用状況を数字で示すと次のとおりである。

グループ数 宿泊延人数 定員比

6月	六三	三、五二九	四四
7月	一一	五、七四七	六九

●開館して20年——宿泊者数延べ八六万人に

ハウスは'65年7月5日、開館記念の第1回大学共同セミナーで最初の宿泊者を迎えた。それより数え本年7月4日まで、満二〇年になる。この間ハウスで合宿研修をされたゼミや研究会の数は一八、六七二、宿泊者は延べ八六〇、五八八人に達する。記念日の翌日、七夕前夜の週末6日(土)、

三日亡くなりましたが、引続きわずかながら主人名で、主人の誕生日に寄付させていただきます。 妻 川島須美子
◇ ハーバード大学、エセックス大学に暫く行っており、ご返事がおくれました。

●新入生合宿が終了
6・7両月中に実施された新入生合宿研修でクラス単位以上の規模のものには別表に示すとおりで、前号記載の4・5両月分と合わせると、今季四ヵ月間に行われた新入生合宿は計四九件(三〇校)、参加者数は五、三六八人(うち教職員五八四人)、延べで八、〇七〇人(六六九人)となる。これは同期間の総延人数の三九%に当たる。

なお、6・7両月には、一八年目の白梅学園短大保育科と一九年目のお茶の水女子大全一九学科が、例年同様前後二班に分かれての「全群使用」の合宿を実施された。前者は田中未末学長、後者は藤巻正生学長が、ともにこの伝統の行事でフレッシュマンたちと共に来泊されている。

●各種ゼミ・研究会から
個別大学のゼミ合宿については、別掲「利用状況」で指導教授

上智大学教授 川田 侃
◇ 昨年春、30年余つとめた東京大学教養学部を停年退職いたしました。今年4月から秋田大学に勤め、ほとんどの日々をこちらで過ごしております。 山崎 誠

のお名前をご覧いただきたい。7月後半には夏休み帰省前の合宿が集中する。その中に、駒沢大仏教学部二つのゼミの初利用がある。今春同学部が試みた新入生オリエンテーションでハウスを初めて体験された平井俊榮(学部長)、石川力山両教授が、こんどはご自分のゼミの初合宿で再来されたものである。ご縁の深いおせいの先生方の中には、東大教養学科(国際機構)の集中講義)の小和田恒講師(外務省条約局長)の久々の来泊がある。'74年、国連局政治課長当時、「国連」をテーマとする共同セミナーに指導教授としてご協力いただいたのが機縁である。本号の『わたしたちの合宿』(別掲)には、東大教養学部・芳賀徹教授による「三四郎」ゼミにご登場願った。芳賀教授は初期の頃より当ハウスの企画委員・共同セミナー委員をつとめられたハウスのよき理解者であり、また東大大学院「比較文学・比較文化」春の合宿の常連教授でもあられる。

6月末には恒例の10大開会セミナー(国際関係論)が開催されている。今回のテーマは「冷戦——なぜ戦後四〇年間、慢性的緊張状態が続いてきたのか——」。参加者は一八二名。'73年以来の十三回目で、今年も各参加大学の実

は、別掲「利用状況」で指導教授

昭和60年6～7月

新入生オリエンテーション実施状況

大 学 名	参加者数
● 6 月	
東京都立大・法学部	66 (5)
東京学芸大・数学教育学科	166 (10)
白梅学園短大・保育科	*163 (16)
白梅学園短大・保育科	*146 (13)
東京都立大・化学科	109 (14)
埼玉大・機械工学科	87 (9)
横浜市立大・医学部付属高等看護学校	*126 (10)
早稲田大・建築学科	202 (9)
● 7 月	
お茶の水女子大・文教育学部 (11学科)	233 (25)
お茶の水女子大・理・家政学部 (8学科)	223 (22)
計 10 グループ	1,521人 (133人)

(注) 参加者数の()内は内数で教職員。*は2泊,他は1泊。実施順。4～5月実施分は前号に掲載。

行委員を中心とする学生主体の見事な運営で、大学間交流の実をあげた(12頁写真)。

夏休みの定例行事、毎年7月末に行われる京浜女子大の「多摩丘陵自然観察講習会」では、六名が三泊してセミやアゲハチョウの羽化の生態に触れた。参加者の一人、石田香織さんから体験のリポート(下掲)が寄せられたのでご披露したい。

●学術教育団体の集いから

7月の定例集会のうち、大学英語教育学会(JACET)の夏期セミナーは二年ぶりの再来、ハウスでの開催は通算一七回目。英国の代表的言語学者D・クリスタル博士ら外国人講師と全国各地からの英語教師計三八名が六泊しての集中的研修で、最終日には全員に修了証が手渡された(下掲写真)。

ICU在学中にもよくハウスで合宿をされた福岡女学院短大の石丸曉子さんからは下掲の感想が寄せられた。なお、開期中、一夜全員

が近隣・上柚木の盆踊りに参加、地元住民から大変な歓待を受けたというハプニングもあった。

日本ワイルド協会恒例の夏期セミナー(今回のシンポジウムは「オスカー」ワイルド・一八九五～一九〇〇)では、井村君江、明星大教授(同協会会長)、荒井良雄・駒沢大教授らご縁の深い先生方をお迎えした。訪日研修グループでは、国際生活体験協会の計画で来日した米国人学生一六名が、東京日本語センターに、夏の日本語研修で一三泊、その間、夏の風物詩七夕を経験し(下掲写真)、遠来荘で作法の訓練を受け、在泊グループとの交流を楽しんだ。

●天の川に願いをこめて

七夕の笹竹が、今年も構内三ヶ所に用意され、これに来泊者や職員から歌・メッセージの短冊が寄せられた。ここに今年の代表として「数首を選んでご紹介したい。」

▼セミナーや七月七日の逢瀬かな
▼ここで味わった清々しさを



七夕の飾りつけと「国際生活体験」の米国人学生たち(交友館)

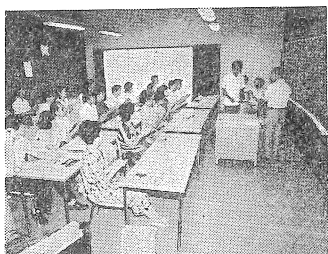
6月

(63グループ、延三、五二九人)

早稲田大学教授 佐藤 祐光
東京都立大学助教 大村 芳正
東京学芸大学法学部新入生歓迎会
東京学芸大学教育学部新入生
合宿研修
立教大学助教 北岡 伸一
白梅学園短期大学保育科新入生
オリエンテーション*
東京都立大学理学部化学科新入生
オリエンテーション
東京大学教授 原島 文雄
埼玉大学機械工学科新入生研修
明治大学講師 平沼 高

●利用状況

* 11月2日再利用
* 11月3日再利用
日掃り利用を除く



大学英語教育学会(JACET)開講式
——修了証を受ける参加者(国際セミナー一輪)

■自然観察講習会に参加して

京浜女子大学短期大 石田 香織
初等教育科2年

三泊四日の自然観察講習会を通して、私は今までになかった貴重な体験をすることができました。今、充実感で一杯です。

最初に行ったのは、セミのぬけがら探しです。雑木林の木や草の一本一本を真剣に見ながら、薄茶色のぬけがらを探し回りました。自分で見つけた時は嬉しく、いつものまにか夢中になっていました。

セミナー室にもどってからぬけがらを集計し、種類によって形やぬけがらがつく場所が違うことを知りました。それより僅か一時間で、一四〇個のぬけがらを見つけたことに驚きました。狭い範囲に実に沢山いるのです。

こうしてセミのぬけがらをつく場所が大体わかったので、夜は羽化のため地中から出てきた幼虫探しです。幼虫は木に登り、適当な場所を探します。見つかった体を固定し、体の動きを止めます。五分位経ってから背中を割り、頭、複眼、触角、羽、足の順序で出てきます。殻から完全にぬけ出

ると、殻にしがみつき、羽を乾かします。乾くのと同時に羽の色が、ミルク・グリーンから種独特の茶色に少しずつ変化していきます。

私はセミの羽化を初めて見ました。羽化の一連の変化を観察していて、心に何か暖かいものを感じました。それは生命の神秘さへの感動ではないかと思えます。自分の目で自然を見ることの大切さを、実践を通して学ぶことができましたように思います。

またある時は、先生と一緒に昆虫の観察に出かけました。セミナー・ハウスの敷地内だけでも、ずいぶんたくさんのチョウやトンボの種類がいるのです。そして今まで、身近な自然を随分見落としていたことに改めて気付きました。

空に舞っているチョウをほんの少しよく見るだけで、チョウとそれを取り巻く環境に興味が湧いてきます。一つ一つを確かに見ることが、自然観察であることを教えられるました。自分で実際に自然に触れる、つまり自分の目、耳、手、足を使って確かめていくことの大切さも学ぶことができました。これからは折にふれ身近な自然を観察していきたいと思えます。

■豊かな教育環境

福岡女学院短期大学講師 石丸 曉子
大学英語教育学会第19回夏期セミナーが、元レディング大学教授クリスタル氏を迎えて7月24日より一週間にわたり開催された。このセミナーに参加するのは私にと

●わたしたちの合宿

三四郎、美禰子たちとの『三四郎』



——東大教養学部芳賀ゼミ——

東京大学教授 芳賀 徹

・行間を雷鳴に読む『三四郎』
・夕立(ゆだち)すれば美禰子たち
・まち人魚(マーメイド)
・虹立つと声ありて部屋は水の
色

に、なにか一層睦まじくつろ
いだ感で漱石『三四郎』の世
界のなかに入りこんでいった
夏休みになりかけの七月半ばの
合宿であった。

……と即興の駄句も生まれる
ほどだった。セミナー・ハウスの
丘はしばしば劇的な時空を演
出するが、その日も演習のさな
かににわか風が立ち、雷が鳴
り、丘の林をいっせいに揺すつ
て驟雨が過ぎていったのであ
る。出席の男女学生二十余名も
私も、呆気にとられて、大きな
ガラス窓の外のその劇にしばし
見とれている以外になかった。

実はいつものことだが、八王
子には出かけてくるまでは気が
重い。他の同僚たちが早々と休
みに入ったりしているときに、
なんで自分だけがお人好しにも
演習合宿の約束などしてしまっ
たのかと、悔んだりもする。と
ころが、もう十七、八年も通い
慣れたこの丘に来て、学生たち
と一緒にになり、彼らがいっしょ
上にいきいきと面白い発言をし
はじめると、とたんに嬉しくな
る。やはり来てよかったと必ず
思う。そしてへとへとになっ
て、ほっとして帰るのである。

もちろん、大学で授業をして
いる間にも夕立ちは来るし、鳥
は鳴くし、雪も降る。だが大学
の教室では、そのような事象に
感応したり、影響されたりして
いる時間の余裕も心理のゆとり
もない。せつせと前に進む一方
だ。セミナー・ハウスではその
贅沢が許される。学生たちと教
師の間に、そして論じ合ってい
るテキストのなかにまで、この
丘の上の自然の気配がいつのま
にか入りこんできて、心地よい
影を落とす。

私たちが夕立ちと虹のあと
に、なにか一層睦まじくつろ
いだ感で漱石『三四郎』の世
界のなかに入りこんでいった
夏休みになりかけの七月半ばの
合宿であった。

成蹊大学教授 朝倉 孝吉
早稲田大学建築学科新入生オリ
ンテーション

一橋大学教授 竹内 啓一
駒沢大学助教授 福岡 政行
東京都立大学助教授 日向野幹也
明治学院大学教授 宮野 彬
武蔵大学講師 公文 溥

東京学芸大学総合史学研究会 山川 仁
東京都立大学講師 伊藤 喜栄
慶応義塾大学教授 長内 了
中央大学教授 師岡 孝次
東海大学教授 川口 健一
東京外国語大学助手 柳沢 治
東京都立大学教授 和田 英一
東京都立大学教授 桐敷真次郎
桜美林大学助教授 相馬 順一
横浜国立大学医学部付属高等看護
学校新入生校外研修

和洋女子大学講師 横坂 健治
東京YWCA専門学校英語科
日本女子大学附属高等学校高校生
活研究セミナー

第22回大学教員懇談会
中国労働運動史研究会
第6回大学院共同セミナー
第13回10大学合同セミナー
日本建築学会

「宮沢賢治」読書会
御茶の水キリストの教会
建築セミナー⁸⁵

工業所有権研究会
織研新聞社
京王百貨店
日本生産性本部
日本電気

ウチダコンピュータシステム*
雪印物産
酒井薬品*

伊藤忠エレクトロニクス

って初めての経験であった。しか
し、Plain Living and High
Thinkingという標語を掲げる大
学セミナー・ハウスへは、五年ぶ
りのなつかしい訪問となった。と
いうのは、ICUの大学院生時代
に、数回宿泊の経験があったから
である。宗務部の学生修養会や、
英語学のセミナーで友人達や、ご
同行いただいた井上先生、升川先
生らと、ユニット・ハウスの宿泊
した、食堂で会食し、談笑、討論を
した経験がある。八王子駅周辺、
野猿峠への沿線が人口の急増を告
げているのに較べて、遠来荘わき
の小道を登って来ると、都心では
耳にしなかったセミの声が繁く、

五年前と変わらない建物が、濃い
緑の木々の間に点在している。身
辺の傾いを忘れるせいか、心が
伸びやかになる。学生時代と変わ
りなく、講演とディスカッション
を心から楽しく思った。セミナ
ー・ハウスの立地条件、および生
活条件は、参加者に、平等な人間
関係と、豊かな教育環境を与えて
くれる。欧米での研究生活で味わ
った雲田気、ここにはある。
Plain Living and High Think-
ingが文字どおり生きている場だ
がある。次回この場を訪れる機会が
与えられる時には、この場と、標
語とを共有できる友と、語り合え
ることを心待ちにしたい。

三菱鉛筆
東京城南三菱自動車販売
八王子信用金庫
東芝精工工場
八王子農協
アイワールド
富士フアコム制御
国際交流サービス協会

〔個人利用〕
共和工業所
一橋大学大学院生
産業能率大学教授

■7月
(11)グループ、延五、七四七人)

駒沢大学助教授 谷敷 正光
東京都立大学助教授 速水佑次郎
淑徳大学長谷川・金子・千徳・米
川・田中・許斐・下山合同ゼミ

東京工業大学助教授 小林 彬
慶応義塾大学教授 榎谷 昭彦
明治学院大学教授 田村 剛
国際基督教大学心理学サマーセ
ミナー

東京大学教授 木村尚三郎

法政大学教授 金山 行孝
立教大学教授 小西 正捷
東京理科大学教授 水本 浩
早稲田大学短大講師 沖塩莊一郎
早稲田大学助教授 大久保正健
早稲田大学助教授 大槻 健
明治学院大学助教授 岡田 信弘
共立女子大学講師 堀田牧太郎
東京都立大学都市研究センター
東京都立大学助教授 坂元 忠孝
中央大学助教授 池田 正孝
東京都立大学都市計画研究室ゼミ
東京都立大学助教授 鳴沢 実
横浜国立大学助教授 佐々木弘明
お茶の水女子大新入生セミナー*

一橋大学教授 藤原 彰
武蔵大学講師 鈴木 勝則
東京経済大学助教授 古川 純
東京大学助教授 平野 敏石
東京大学助教授 芳賀 徹
東京都立大学助教授 桐谷 維
日本大学助教授 原田 行男
成蹊大学助教授 安藤 英治

東京都立大学助教 児玉昭太郎
 大妻女子大学助教 大場 幸夫
 武蔵大学教授 佐野 晃
 駒沢大学教授 小井 俊榮
 東京農工大学教授 平井 駿介
 東京大学コーロ・ソノ合唱団
 早稲田大学教授 川原 栄峰
 駒沢大学助教 石川 力山
 東京大学講師 小和田 恒
 早稲田大学教授 鈴木 英寿
 中央大学夜間部学生自治会
 青山学院大学講師 富田 功
 上智大学教授 兼光 秀郎
 学習院大学教授 小倉 芳彦
 千葉商科大学教授 影山 信一
 千葉大学教授 田中 國昭
 早稲田大学コンツェルト

予 告

▼第12回国際学生セミナー

主題 発展と平和のモデルを求めて
 ——海外体験をどう活かすか——
 期日 11月29日～12月1日
 ▲ゲスト講演▼
 財界人を予定
 ▲セクション演習▼
 A 海外留学は何になる (阿部美哉氏、中村輝子氏) / B 海外援助と文化効率 (菊地靖氏) / C 海外勤務 (広野良吉氏、松井やより氏) / D 海外研修生と日本社会 (木全ミツ氏)

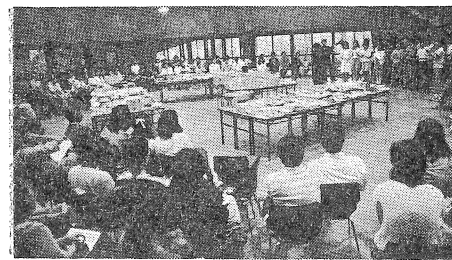
▲話題提供▼
 カーティス・マクフアーランド氏
 ▲募集人員▼約70名 (日本人・留学生40名・社会人10名 外国人・留学生15名・社会人5名)
 ▲募集締切▼11月19日
 ▼第134回大学共同セミナー

明治大学助教 輿水 肇
 東京理科大学教授 伊丹 邦夫
 慶応義塾大学助教 小林ポオル
 東京工業大学教授 熊田 慎宣
 成蹊大学教授 肥後 和夫
 文京女子短大教授 宇野 重昭
 東京大学教授 鷗川 武久
 駒沢大学助教 見田 宗介
 芝浦工業大学建築学科八王子合宿
 セミナー
 電気通信大学社研 栗原 彬
 立教大学教授 増田 茂樹
 明治学院大学教授 宇野 重昭
 上智大学講師 宇野 重昭
 立教大学栗原・深沢組2年ゼミ
 青山学院大学教授 鈴木 栄一

主題 エントロピーなしで生きる

期日 12月13～15日
 ▲炭焼き指導▼
 元農林水産省林業試験場木材炭化室長 杉浦銀治氏
 ▲全体講義▼
 エントロピーの概念 一橋大学助教 室田 武氏
 ▲セクション演習▼
 A エントロピー論争 (樋田敦氏、江沢洋氏) / B 生産・消費とエントロピー (中村達也氏) / C 生物圏におけるエントロピー経済 (杉浦銀治氏、室田武氏)
 ▲シンポジウム▼
 I 水と土と太陽と (樋田敦氏、杉浦銀治氏) II くらしと汚しとエントロピー (暉峻淑子氏、中村達也氏) III 考えることの熱力学——情報エントロピーと物理エントロピー (竹内啓氏、室田武氏)

▲募集締切▼12月3日



恒例の10大学合同セミナー——送別昼食会で各大学がエールの交換 (講堂)

上智大学 Ad Hoc ITC 学習院大学音楽愛好会
 学習院大学助教 持田 邦夫
 中央大学通信教育部 田中 義久
 明星大学通信教育部 野沢 浩
 専修大学教授 氏井 巖
 神奈川大学教授 石川 博明
 国際商科大学講師 牧野 誠一
 国士館大学講師 野沢 浩
 京浜女子大学生物研究会野外観察講習会
 フェリス女学院大学講師 牧野 誠一
 文教大学女子短大英語英文学科 サマーセミナー
 都立片倉高校夏期セミナー
 丘陵地研究会
 函数方程式サマーセミナー
 古代解放運動史研究会
 児童福祉法研究会
 日本ワイルド協会夏期セミナー
 デルマ研究グループ
 早稲田大学システム科学研究所
 朝日カルチャーセンター
 建築設備耐久性研究会

陸蟬会を中心にした
 開館20周年を祝う会

開館一周年に当たると昭和42年7月3～5日に、はじめて学生主体の企画による共同セミナーが実現した。当時の世相を反映して、主題は「大学の理念と現実」であった。
 陸蟬会は、この第「6」回大学共同「セミナー」に由来している。運営に参加した学生たちは、大学セミナー・ハウスOB会を結成し、今日まで「家族ぐるみ」のつき合いを続けている。このたび開館20周年を祝って、7月20日の午後、丸の内の銀行クラブで小さな集まりがもたれた。当日の主賓は、飯田宗一郎名誉館長と白井



常・東京女子大学名誉教授、呼びかけ人は藤本絃氏 (日本長期信用銀行勤務) であった。

フェリス女学院大学教授 土肥 玲子

●編集後記

「新宿の高層ビル群が親しげに語りかけてくる」との一参加者による自己体験の披露が導入部となった第6回大学院共同セミナーは、二重、三重におおひ隠された人と人の関係性の原点を照射しようとする試みであった。大学院セミナーの名にふさわしい専門性の高い討論が展開されたが、極力、平易な表現でその内容を紹介することに編集の主眼をおいた。その成否は読者のご判断に委ねるとして、作業に当たったスタッフの労を多としておきたい。
 なお、100号を契機に、次号から本紙の体裁を全面的に改訂してお届けする予定である。(能)

東京日本語センター
 サンケイインターナショナルカレッジ
 文学教育研究者集団
 福島県三春町役場
 日電アネルバ
 日本分光工業
 沖電気工業
 東芝エンジニアリング
 日本電機*
 酒井薬品*
 埼玉銀行従業員組合
 雪印物産
 京王百貨店
 不動産建設
 カシオ計算機
 日本生産性本部
 キヤノン
 「個人利用」
 東洋大学教授 堀 光男
 ティージー不動産 米山 哲夫